

平和な明日のために違いを受け入れること

(原文は英語)

ハシーブ・イクバル (22 歳)

パキスタン

ラホール教育大学

私の国には、シンド人、パローチ人、パンジャブ人、パシュトゥーン人など、独自の文化を持つ多様な人々が住んでいます。私は、この多様な国を構成する文化、方言、慣習が美しく混ざり合うのを個人的に経験することができ、誇りを感じてきました。

パキスタンで生まれ育った私は、9.11 米国同時多発テロ後のアフガン戦争の混沌とした余波を目の当たりにしました。戦争の影響は、私のコミュニティ全体、特にアフガニスタンと国境を接する部族地域にも及びました。これらの地域は武力行使や過激化が発生する温床となり、家族は崩壊し、コミュニティはばらばらに引き裂かれていました。

混乱と不安定さの中、私は、大きな惨事から生まれた忍耐と連帯の物語を思い出します。大きな苦難に直面しながらも、部族集落の人々は、老いも若きも共に平和への道を見出しました。彼らは、暴力のパターンを断ち切る唯一の方法は、違いを受け入れ、お互いの間に敬意を育むことであると気づいたのです。

このストーリーをきっかけに、乾いた土地に生える弱々しい苗木のように、若者主導の活動が芽生えてきました。これらの組織により、様々なバックグラウンドを持つ若者、即ち部族集落に住む人々や都市部に住む人々、様々な民族性を持った人々が集結して、討論や意見交換に参加し、和解への努力を加速させました。

同様の取り組みとして、あらゆるバックグラウンドの若者たちが彼らに起こった出来事や願望について自由に共有できる、平和について議論する場が設けられました。こうした議論の場は、様々な観点が融合する場となり、ここで人々が紛争中に直面した苦難や問題、自分たちが大切にしている願望が語り合われました。

こうした交流の中で、私はあるパシュトゥーン人の少女、パルワシャのことを思い出しました。彼女の家族は全員、暴力の被害を直接受けました。彼女は戦争によって負った傷があるのにも関わらず、平和的な未来を築くために毅然とした態度を貫きました。「私たちは、偏見と分断がもたらす壊滅的な結果を経験しました」と、彼女は涙ながらに語りました。「思いやり、理解、受容の上に成り立つ新しい道を切り開くのは、私たち若者なのです」

こうした感動的なストーリーや議論を通じて、変化が加速しました。若者が協力し、社会経済的な分

断を超えた地域社会のイニシアティブを生み出しました。彼らは、理解や平和を築くための、学習活動や職業訓練コース、文化交流の取り組みを始めました。

さらに、こうした若者主導の平和プロジェクトの効果は、その後、数カ月から数年かけて、部族地域全体へと広がりました。蒔かれた相互理解の種が芽を出す中で、それまで侵略や困窮に苦しんでいた町が徐々に安らぎを取り戻していきました。若い知性にとって教育機関や学校は、お互いに肩を並べて学び、成長し、宗教や文化の境界を打ち破る安全な避難場所となりました。

この先、パキスタン人の若者である私たちにとってきわめて重要なのは、平和の炎を持って前に進むことです。私たちは、長期的な平和の創造とは、違いを受け入れるための忍耐とコミット、そして揺るぎない情熱が必要とされるプロセスであるということを実感しなければなりません。

他者と積極的に関わり、言論活動を支援し、多様な文化の垣根を越えた理解を生み出すことで、私たち若者は大きな影響力を発揮し得るのです。私たちは、偏見に立ち向かい、誤解を取り除き、思いやりを築くことで、私たちの文化に平和の種を蒔くことができるのです。

私たちは、平和やお互いへの尊重を育む教育プログラムを通して、忍耐や文化間の相互理解を促進することにより、連帯の絆を生むのに必要なスキルを次世代に引き継ぐことができます。包括的な立法を促し、少数派の視点を強調し、公正な社会への支持を表明することで、一人ひとりが歓迎されると感じられるような雰囲気醸成することができるのです。

アフガン戦争後の平和への道のりは、異なる意見を受け入れることによる変革の潜在的な可能性を示してくれました。私たちは、過去の傷が癒えるような未来を築いていくことができます。人類の交響曲を歌い続け、調和のとれた、歓迎すべきパキスタンの未来を実現するために協力し続けましょう。